

すまいるたうん



発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

荒川区手をつなぐ親の会名誉会長

高村デンさんの半生

「普通の子どもと思っていました」

昭和38年3月末、高村デンさんが40歳の時、北海道から、ご主人と4人の男の子とともに上京してきました。

「おしっこを漏らして、学校から電話が、かかって来ました」

三男さんが、小学校入学すると、思いがけない出来事が始まりました。家では、兄弟や友達と仲良く普通に遊んでいたのに、学校に行くと「喋れない子」と判断されました。子どもも、おしっこを漏らせば、家に帰れると、そんな日々が続き、学校には通わなくなりました。（どうして、あの子は家にいるんだろう」と近所の目も気になりました。

「どこに行けば、いいのだろう」

上京したばかりで、回りに知人もなく、ご主人も、三男さんが障がいがあることを認めず、デンさんはひとり苦悩を抱え、手探りであちこちの学校を奔走しました。「子どもの障がいは、何とかなると期待していたけど、しようがない」

4年の月日が流れ、大門小の特別学級に行くと、子どもが喜んで学校に行くよ

うになりました。お子さんに知的障がいのあることをデンさん自身も、向き合っ受けて止めることができませんでした。

「子どものためなら仕方ない」

当時、特別学級に入ると、自動的に障がいのある子どもの「親の会」に入ることになっていました。そこで、会計を頼まれ、その後「連合会」に入りました。

「やると言っただけからは、やらないと」

三男さんは、荒川第一中学を卒業後、二男さんの勤めている会社寮に入り、自立されていきました。

区内の障がいのある人達が学校卒業後、働く場所を作ろうと、いろいろな方の協力のもとに古紙回収、お茶の販売、一円玉募金や寄付金で、熊野前に二階建ての民家を借りて、あさがお作業所を開所しました。借りた民家は古く、二階に上がるには階段ではなくてハシゴでした。夏は扇風機、冬は石油ストーブ、電話も公衆電話を設置しました。デンさんが、56歳の時です。

「好いてくれて、両手にぶら下がってくるんです」

当初の利用生は、8名。利用生さんの笑顔に伝えるために、開所の前日には、ラジオ体操を練習してラジオ体操の指導もしました。

「皆の明日の作業ができるように」

利用生の折った段ボール箱を包むのは、デンさんの仕事です。山と積まれた段ボ

ルを出荷するようにならないと、狭い作業所で作業できません。ひとりで、夜9時、10時まで包装していました。

「布団被って泣きました」

半年は収入が入って来ず、利用生のトラブル、職員のトラブル、保護者のトラブル等いろいろな悩みをこぼす場所が無く、ひとり布団の中で泣いておりました。

「あんたが辞めて作業所の利用生がどうするんだ」

当時の知的障がい者育成会の理事長に云われて、ハッと胸を打たれ、今でもその言葉を思い出すと涙が出る思いです。「自分が辞めさせたと思われたくないから、辞めなくていいよ。」他界されたご主人もと話されていたことを笑って話されていました。

「良い方達に恵まれました」

高村さんは、まだまだ現役です。息子さん達、家族の理解、協力も得て活動されております。

あさがお作業所は、その名前の通り、町屋と小台に美しい花を咲かせて、当初の8名から百名近くの人達が仕事をされています。

あさがおの花言葉は「愛情」「愛情の絆」「結束」「明日もさわやかに」。高村デンさんの控えめな柔らかな笑顔が、美しいと感じました。